

山形医学 2003 ; 21 (1) : 85-88

第 2 回山形大学医学部奨励賞選考過程及び受賞者について

遠藤政夫医学部長

広く医学の進歩に貢献する独創性の高い論文を発表した若い研究者に「山形大学医学部奨励賞」を授与するための制度として、平成 12 年 1 月 5 日に「山形大学医学部奨励賞取扱要項」が制定され、昨年度第 1 回目の公募を行い、奨励賞を授与した。

同項目において、応募資格要件及び選考方法は等は次のように定められている。

- (1) 応募資格要件は、前年度において博士（医学）の学位を授与された者（後述のようにこの点は来年度から変更となります）。
- (2) 選考方法は、研究科長（委員長）、学務委員会委員長、論文博士委員会委員長及び研究科委員若干人で構成した「山形大学医学部奨励賞選考委員会（以下「選考委員会」という。）」が選考し、医学系研究科会議で決定する。
- (3) 受賞者は、研究内容の要旨を山形大学紀要（医学）にて紹介する。

今年度の選考委員会は、遠藤政夫研究科長（委員長）、荻野利彦学務委員会委員長、大谷浩一論文博士委員会委員長、藤井順逸生化学第二講座教授、若林一郎衛生学講座教授、一瀬白帝分子病態学講座教授、河田純男内科学第二講座教授、早坂清小児科学講座教授、山下英俊眼科学講座教授の 9 人の委員で構成された。

平成 14 年 1 月 29 日付けで 3 月末日を締切日として公募を行ったところ、5 人の方から応募があった。

第 1 回選考委員会を平成 14 年 4 月 30 日に開催し、応募者ごとに審査担当委員を割り当てた。また、投稿雑誌に係るインパクトファクターも重要な審査要素になるので、調査のうえ各委員に連絡するとともに、審査の公平を期するため、各委員とも応募者全員の論文を検討す

ることが確認された。

第 2 回選考委員会（最終）を 6 月 4 日に開催した。各委員から、担当した応募者の論文内容について講評があった後、論文内容に関する活発な質疑応答が行われた。その後、選考方法についての意見交換が行われ、各委員が採点表（評価項目を 5 つ設定し、最高点 5 点とし 1 点刻みで点数化したもの）に応募者全員の評価結果を記入することとなった。本年度の応募論文は、いずれもインパクトファクターの高い専門誌（1 F : 1999 年、2.352 ~ 7.666、2000 年、2.203 ~ 7.368）に掲載されたレベルの高いものであった。評価の結果、皮膚科講師武田光氏が最高点（40 点）を取得した。

同氏の論文は、投稿の要旨内容で紹介されているとおり、「皮膚に発生する腫瘍のうち、臨床的にも病理学的にも最も難しいとされている有棘細胞癌とケラトアカントーマの鑑別をアンジオテンシン 1 型受容体の発現の違いを観察することにより可能にし、これらは発現の違いが皮膚及び皮膚腫瘍の病態生理の解明に極めて有用な情報となる」ことを示し考察した内容で、臨床的にも貴重な知見を見出しており、選考委員会委員全員一致で「医学の進歩に貢献する創造性の高い論文である」と認め、「さらなる医学の発展につながる期待が高い」と認められた。

平成 14 年 7 月 2 日開催の研究科会議に同氏を今年度の奨励賞受賞者として推薦し、諮られた結果、全員一致で同氏の受賞が承認された。

武田光氏は昭和 39 年の生まれで、平成 3 年 3 月本学部医学科卒業後、直ちに本学部附属病院皮膚科に入局、平成 4 年 6 月同講座助手を経て、平成 5 年 10 月から平成 7 年 4 月まで他病院で研鑽を積み、同年 5 月本学部附属病院皮膚科に復帰した。平成 10 年 12 月同講座助手を経

て、平成 12 年 3 月から皮膚科医局長に就任し現在も同医局長・講師として活躍されている。平成 13 年 9 月に博士（医学）の学位を授与された。

最後に、これまでの反省点を踏まえ同要項の一部を次のとおり改善し、来年度からこの内容で公募することとなったので、お知らせします。

1. 募集対象者は次のとおりとする。

1) 募集する前年の 3 月又は 9 月に博士（医学）の学位を授与された者。

2) 募集する年の 3 月に博士（医学）の学

位を授与される予定の者。

2. 募集論文は学位論文（学位論文の基礎となった論文を含む）とし、査読制度のある学術雑誌に受理又は掲載されていること。

3. 応募回数は、各研究者につき 1 回のみとする。

本奨励賞は、山形大学医学部における若手研修者の研究取り組みに対する意欲を促進するために設けたもので、今後も継続的に年一回の公募を行います。多くの若手研究者の応募を期待しております。